

オベイトポンティックの臨床

金田貴哲^a, 園山 亘^b

Clinical and Laboratory Techniques for Application of Ovate Pontic

Takaaki Kaneda, DDS^a and Wataru Sonoyama, DDS, PhD^b

近年、補綴治療に対して機能的のみならず審美的にも良好な結果を長期間維持することが求められている。ブリッジによる欠損修復に際しては、欠損部の歯冠形態をより審美性高く、自然な形態として再現、修復する方法としてオベイトポンティックを用いた臨床手技が多くみられるようになってきた。このオベイトポンティックを応用するためには、可能であれば抜歯前からのプランニングに基づいた硬軟組織の形態調整を含む補綴前処置、プロビジョナルレストレーションを用いた歯肉レベルの微調整等、チェアサイドでの高度な臨床手技が必要とされる。さらにはオベイトポンティックの長期的な予後を良好なものにするために、チェアサイドで構築され周囲組織を適切にサポートしているプロビジョナルレストレーションの形態をラボサイドでファイナルレストレーションに具現化し、必要に応じてブラッシュアップすることもたいへん重要な要素である。しかしながら、オベイトポンティックは1990年代前半に紹介されはじめた臨床手技であり、他の補綴関連手技と比較するとまだまだ歴史が浅く、長期的に良好な結果を得るためのポイントは確立されていないとも考えられている。

そのような中、第123回学術大会において、「オベイトポンティックを考える」と題された臨床リレーセッションが開催された。本セッションではオベイト

ポンティックに関して経験の豊富な3名の先生に登壇いただき、オベイトポンティックの応用にあたっての要所を多面的に講演いただいた。また、講演後には長期的に安定した予後を獲得できる手法やその要点などについてのディスカッションがなされた。

本企画はそれぞれの先生に当日の講演内容のみならず、最新の知見をまとめていただいたものである。大村祐進先生（山口県おおむら歯科医院）には、オベイトポンティックを用いたブリッジ作製を成功に導くための欠損部軟組織に対する前処置を含む補綴術式について症例をご提示いただき、複数ある前処置についてのポイントをまとめていただいた。白石和仁先生（福岡県白石歯科医院）には、前処置として、矯正の延出による歯根膜を利用した対応や、硬組織を含めた回復を図るための新たな術式をご提案いただいた。木村好秀先生（和田精密歯研株式会社）には、技工士の立場からチェアサイドで構築した理想的なポンティック形態をファイナルに移行させるための技工術式を、模型調整の行い方やそのタイミングを含めて具体的にまとめていただいた。

前述のように、オベイトポンティックは少なくとも部分的には確立されていない治療手技とも考えられている。それ故に、本企画論文が、オベイトポンティックに関する議論の端緒となることを望んでいる。

^a 中国・四国支部

^b 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野

^a Chugoku-Shikoku Branch

^b Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences